



村上水軍の活躍した海域を巡る : 海事博物館特別専門員研修旅行報告

溝下, 和裕
目瀬, 好男

(Citation)

海事博物館研究年報, 52:45-49

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496299>



村上水軍の活躍した海域を巡る — 海事博物館特別専門員研修旅行報告 —

特別専門員 溝下和裕
特別専門員 目瀬好男

はじめに

2018年『北前船の里を訪ねて』特別専門員研修旅行を実施しました。(研究年報第46号掲載) その後は新型コロナパンデミックの影響もあり、暫く次の研修旅行ができずにいましたが、今年やっと第2回目の実施に至りました。

今回の研修旅行は、鎌倉時代より物流のハイウェイであり『村上海賊一族』が支配した芸予諸島の海域(広島宇品港から大三島・宮浦港)を船でたどり、瀬戸内海の美しい島々の景観とそれらの島を結ぶ近代橋梁をくぐり、芸予諸島に眠る『日本遺産村上海賊』の歴史に触れることを目的にしました。

(この地区は2016年4月『日本最大の海賊の本拠地：芸予諸島“よみがえる村上海賊の記憶”』として日本遺産に認定されました。)

1. 村上水軍とは

瀬戸内海において水軍と称する集団が現れる時期は定かではありませんが、多島海の瀬戸内海では各島に居住する集落が独自に生活の自衛や一部には通航する船から略奪行為をするようになり、船団を組み一つの組織として確立していったようです。

平安時代にはこれらの水軍を取り締まる追捕使として平氏が台頭し、清盛の父・平忠盛が功績をあげ昇殿を許される官位を得て平氏繁栄の基礎を築いています。伊予には河野氏、安芸には小早川氏が勢力を伸ばし、組織として水軍を持つようになり、室町時代に伊予水軍から村上氏が頭角を現しました。

村上氏は芸予諸島に海の関所を設け、通航船から税を徴収する傍ら、水先案内や警護を行うことにより徐々に強大な力を持つようになりました。

彼らが使用する船足の早い船を「関船」と呼ぶのは海の関所を守る船から来ていると言われていました。より小型の船は「小早」と呼ばれていまし

た。これらの船は後の弁才船へと発展し、国内海運を一手に担うことになります。

芸予諸島は速い潮流と狭い瀬戸が多く、海運の大動脈「瀬戸内海」を行き来する多くの船舶は村上水軍に通行料を支払うことで安全に航行できる見返りを得ることができました。

このようにして村上水軍は瀬戸内海に確固たる地位を築くことになりました。別名を村上海賊と呼称されますが所謂「パイレーツ」ではなく、あくまで海上警護と水先案内を柱とする水軍として存在しました。

2. 海事博物館特別専門員参加者

柴田康彦(神戸7N)、吉川道雄(神戸16E)、溝下和裕(神戸18N)、鈴木幸希(神戸21E)、目瀬好男(神戸21E)

(注) N: 神戸商船大学商船学部航海学科

E: 同機関学科

3. 旅程

日程: 2024年11月19日(火)～21日(木)

1日目:

10時: JR三宮駅北側集合出発(6人乗り乗用車を利用)～新神戸トンネル～阪神高速～山陽自動車道～福山西ICよりしまなみ海道～『大山祇神社』訪問～陸岸より『能島/能島城址』近望～『村上海賊ミュージアム』見学～しまなみ海道～広島高速道～広島宇品着。ビジネスイン三島屋泊

2日目:

8時: 広島宇品港からクルージングに出港～音戸瀬戸～大三島宮浦港着～『大山祇神社』再訪問/『紫陽殿』『国宝館』『海事博物館』見学～『生樹の御門(いききのごもん)』～大三島宮浦港出港～大崎下島

御手洗沖～音戸瀬戸～広島宇品港帰港。

18時：広島海洋会有志との懇親会（JR広島駅）～呉へ移動。ビューポート呉泊

3日目：

9時：『大和ミュージアム』見学～『てつのかじら館』見学～音戸瀬戸に面した『戸田本店』昼食～広島自動車道～山陽自動車道～阪神高速～新神戸トンネル～17時30分JR三宮駅北側着

4. 訪問先

11月19日（火）

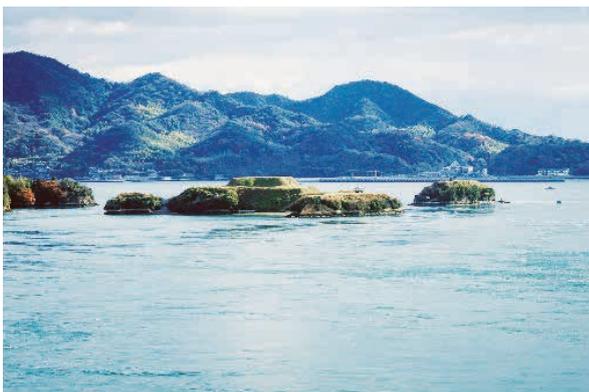
①能島城址（国史跡）

村上水軍は、能島村上氏・因島村上氏・来島村上氏で三島村上氏と呼ばれ、中でも最も潮流の速い能島は能島村上氏が活動拠点とした海城で、航行の難所に位置し通航船に睨みを効かせました。

能島は周囲1 Kmの小島で、周囲を最大10ノットの強流が取り巻く海の難所です。能島のすぐ横の鯛崎島、南東側の鵜島、西側の大島にも、それぞれ城に関連する施設を構えていました。今は上陸には事前に許可が必要なため、今回は対岸の大島から眺めるにとどめました。

能島城址と言っても近代城郭のような天守、櫓を持った城ではなく砦という程度だったようです。14世紀中ごろの築城と考えられており、島全体を階段状に削って平にし、本丸、二の丸、三の丸、出丸を築き、東端に矢櫃と呼ばれる小曲輪を設けていました。また島の南西下段には船着場などに用いた広い曲輪、北下段には船溜まりがありました。

能島に多く残されている遺構が『岩礁ビット／繫船石』です。岩に掘った穴に柱を立て、接岸や繫船に用いたと言われています。



<能島城址の全景>

②村上海賊ミュージアム @250円

室町時代（南北朝時代～戦国時代）に船を警固する小さな勢力から始まり、因島、能島、来島で同じ村上姓を名乗った三家の強い同族意識が、やがて芸予諸島全域を掌握する一大勢力へと成長しました。戦国時代の日本で宣教したポルトガルのカトリック教宣教師ルイス・フロイスの著書「日本史」（歴史書）の中で“日本最大の海賊”と呼ばれた『村上海賊』に関する資料館です。

能島村上家伝来の甲冑、村上武吉／景親親子が着用したと伝わる陣羽織、過所旗（過所船旗）等の貴重な資料の他、能島城跡からの出土品等が展示されています。

ミュージアム入口には、村上水軍の起動力として活躍した小早船《武吉丸》の復元船、宮窪町沖



<小早船《武吉丸》の復元船>

古波止で発見された『繫船石』、小説「村上海賊の娘（著者：和田竜）」の本屋大賞受賞を記念した『石碑』などが展示されています。

11月20日（水）クルージング

◎使用船舶：《ピロピロ号2世》（6.92m、船外機／ホンダ BF150、定員：10人）



<宮浦港停泊中のピロピロ号2世>

◎航路：

・行き：広島・宇品港出港～呉沖～音戸の瀬戸（参考1）／音戸大橋～女猫の瀬戸（参考2）／安芸灘大橋～大三島・宮浦港入港

・帰り：大三島・宮浦港出港～岡村島沖～岡村大橋～小島～大崎下島・御手洗沖～中ノ瀬戸大橋～女猫の瀬戸／安芸灘大橋～音戸の瀬戸／音戸大橋～呉沖～広島・宇品港帰港

③大山祇神社

御祭神は大山積大神一座で、“山の神”であると同時に“大海原の神、渡航の神”とされています。神武天皇の御東征に先駆けて大山積大神の子孫である小千命（おちのみこと）が四国に渡って瀬戸内海の治安を司っていた時に、芸予海峡の要衝である御島（大三島）に勧請鎮祭したと言われています。

古来、武の神として崇敬され、壇ノ浦の戦勝後、源義経が立ち寄り鎧兜を奉納し、他に源頼朝、河野道信らの鎧兜（国宝）が奉納され、これらを納めた国宝館には多くの鎧兜、刀剣が展示収蔵されています。

本殿正面にそびえる御神木で国指定天然記念物『小千命御手植の楠』は、樹齢2600年余りと言われています。本殿は三間社流造り、胡粉丹塗、屋根檜皮葺き。拝殿は切妻造り、素木、唐破風付向拝、屋根檜皮葺きで、いずれも室町時代に再建された国指定重要文化財です。



< 大山祇神社 >

④紫陽殿・国宝館 @1,000円

鎧、兜、刀剣類等、全国の国宝または重要文化財に指定されている武具の約8割が収められています。

中でも注目されるのが一回り小ぶりで胴丸の胸元が膨らんだ鎧／日本唯一の女性用鎧『紺糸裾素懸威胴丸』（重要文化財）があります。これは大山祇神社・大祝家の娘鶴姫の鎧と伝わっています。周防の大内氏が伊予に攻め込んで来た時に、

伊予の守護河野氏とともに鎧兜に身を包み、大長刀を振るい大内軍を撃退したと伝わっています。

三島水軍“河野通信”が奉納した国宝『紺糸威鎧・兜・大袖付』は、平安時代末期に作られたものとは思えないほど色鮮やかで美しい鎧です。

国宝『牡丹唐草文兵庫鎮太刀拵』は南朝初代天皇“後醍醐天皇”の皇子“護良親王”が奉納したと言われています。

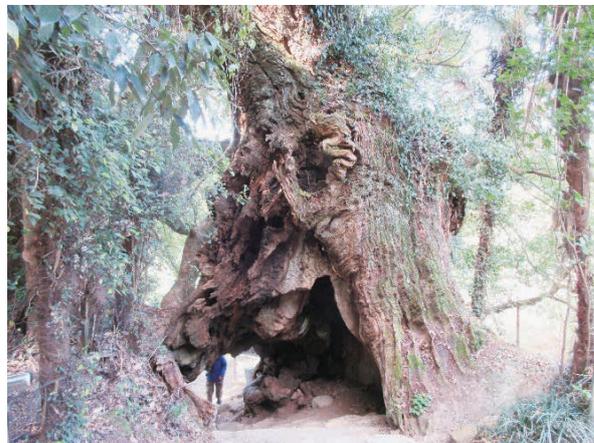
⑤海事博物館

境内には海事博物館も併設され昭和天皇が生物採集に使用された《葉山丸》が現物展示されています。《葉山丸》は長さ15.5m、幅4.2m、15トンの木造船。1934年（昭和9年）昭和天皇の「御採集船」として旧横須賀海軍工廠で建造され、御用邸のある神奈川県葉山の海で、「ヒドロアゾ」という生物の研究材料を採集する際に乗船されました。

先の大戦中は江田島の海軍兵学校で生徒の訓練用に使われました。終戦時に海軍は大山祇神社に奉納して一時保管し、その後、海上保安庁の巡視艇として使われ1956年に役割を終えました。終戦時に一時保管した縁もあり大山祇神社に移され、日本財団の助成で建てられた博物館に1972年3月から展示されています。

⑥大山祇神社奥の院 生樹の御門（いききのごもん）

樹齢3000年の老楠で根回りは31m。真中が自然の空洞になっており、門に見立て奥の院参拝の通路になっています。空洞の中へ続く石段を登れば大きなエネルギーが感じられ、老樹の風格を備えた幹の樹形には感動を覚えます。神秘的なパワースポットとして訪れる人が多いとのこと。



< 生樹の御門 >

⑦芸予諸島

芸予諸島は広島県本土と愛媛県本土の間に位置し、東端が福山市鞆の浦と今治港を結ぶ線、西端が呉市倉橋島・江田島市能美島までと言われており、この海域には大小数百の島々があります。

今回は、倉橋島、下蒲刈島、上蒲刈島、大崎上島、生野島、大三島、大下島、小大下島、岡村島、中ノ島、平羅島、大崎下島、三角島、豊島などの島影を見ながらのクルージングでした。

朝の出港から夕方の帰港まで終日快晴で風も波もなく絶好のクルージング日和になりました。「こんな日はめったにないですよ。運がいいですね。」とのことでした。

村上水軍が活躍した時代とは違い、島には橋が掛かり、海辺には港が整備され、また沢山の造船所や工場、観光ホテルといった大きな建物が建ち、行き交う船も潜水艦から島を結ぶフェリーや貨物船、タグボート、漁船等と様々です。時代は変わりましたが、海から見る島影や水平線は美しく、当時から今も変わらない瀬戸内海の絶景を散見することができました。



< 音戸瀬戸通過中のピロピロ号 >

11月21日（木）

⑧呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）@400円

2005年4月開館。戦艦《大和》1/10（全長26.3m）の巨大模型を主に、太平洋戦争に纏わる海軍資料を展示する博物館で幅広い年齢層が訪れる人気博物館です。戦艦《大和》以外にも多くの精巧な旧海軍主要艦船の模型も展示されており、戦争の愚かさ、教訓を後々に伝える大切な役目を担っています。

神戸大学海事博物館とは展示の主旨が異なるため、商船の展示はほとんどありませんが、当時の

造船技術の粋を垣間見る事ができます。



< 大和ミュージアム玄関・研修旅行参加者 >

⑨海上自衛隊呉資料館（てつのかじら館）無料

屋外展示で実物の海上自衛隊潜水艦《あきしお》を公開しています。機密性の高い実物潜水艦の内部を見学できる貴重な展示です。館内2階は掃海艇に関する展示があり世界中の機雷除去の任務にあたる危険な作業を紹介し解説していて、女性の広報官に展示解説をして頂きました。従来、機雷の除去作業には木造船が当たってきましたが、現在は樹脂製（FRP）の掃海艇が主流になっているとのことでした。

⑩戸田本店

広島県呉市の音戸大橋の真横にある創業明治28年の料理旅館（現在は鯛料理の料亭）。建物は築100年を超える木造3階建てで、純和風の外観と内装は大正時代に建てられたものです。

実業界や旧海軍関係者をはじめ、連合艦隊司令長官山本五十六が足蹴く通ったお店で、当時ふざけて2階の大広間の鴨井を傷つけた時の「刀傷」が残っています。我々は幸いにも3階の「五十六の間」で昼食を頂きました。航行する船舶を眺めながらゆったりと流れる時間を過ごすことができました。

また、廊下には1989年に広島県の「海と島の博覧会」で松木哲先生（神戸商船大学名誉教授）と溝下和裕さん（現海事博物館特別専門員）が設計した復元遣唐使船の音戸瀬戸を航行する写真が飾られていて、懐かしみながら、額入りの写真を撮らせて頂きました。



< 戸田本店 >

おわりに

村上海賊が姿を現したのが南北朝時代で、船を警固する小勢力から芸予諸島の全域を掌握する一大勢力へ成長しました。それを可能にしたのは因島、能島、来島で同じ村上家を名乗った三家の同族意識でした。

因島村上氏は本州側の航路、能島村上氏は中央の最短航路、来島村上氏は四国側の航路を押さえ、芸予諸島の海峡を関所（札浦）に見立て、通航する船の海上での安全を保証する代わりに駄別料（通行料兼警固料）を徴収するという仕組みを確立し、海の戦いに備えるだけでなく、海の関所として瀬戸内海の東西交通を支配していました。

村上水軍（海賊）は金品を略奪するパイレーツではありません。芸予諸島は島々が密に連なっており、狭い海峡が多く、潮の干満による激しい潮



< 広島海洋会の皆様と記念撮影 >

流の存在で、今でも船乗りを悩ませる海の難所です。彼らは数多くの船を守ってくれました。潮を読み複雑な地形を知り尽くした村上水軍は、船乗りとしての技能、資質、心がけ（シーマンシップ）を今に伝えてくれています。

最後になりましたが、広島海洋会の皆様には調査クルージングに際してモーターボートをご提供いただく等大変お世話になりました。紙面をお借りして御礼申し上げます。

[参考]

参考1	音戸の瀬戸	広島県の呉市にある本州と倉橋島の間にある海峡。ほぼ南北に伸びる海峡で南北方向約1,000m、幅は北口で約200m、南口の狭いところで約80m。瀬戸内銀座と称される瀬戸内海有数の航路で、平清盛が開削したという伝説もある。
参考2	女猫の瀬戸	呉市の仁方（にがた）と下蒲刈（しもかまがり）島とをつなぐ安芸灘大橋のすぐ下の海域が、「女猫（めねこ）の瀬戸」。古くは「蒲刈の瀬戸（かまかりのせと）」と呼ばれていましたが、江戸時代になると「猫追門（ねこせと）、そしていまは「女猫（めねこ）の瀬戸」と呼ばれています。なぜ猫なのかわかりませんが、近くに猫山があり、瀬戸の入口に女猫島があることに由来するようです。

(注記)

“海峡” “水道” “瀬戸” には、その大きさや幅等による明確な基準はありません。瀬戸内海で“海峡” と呼ばれているのは「明石海峡」「鳴門海峡」「来島海峡」「上関海峡」「関門海峡」の5海峡です。“**水道” “**瀬戸” と呼ばれる所は数多くあります。



ピロピロ号航跡